

# 『隣の芝生の気も知らないで』

原案…太宰治『女生徒』

[1]

全員、パジャマ姿でそこら中に寝転がり、眠っている。

暗闇と静けさの中、目覚ましのアラーム音が鳴り響き、携帯電話の液晶画面だけが光っている。

Q本、手探りでそれを消す。

そのまま携帯電話を手に取り、それをいじりながら、

Q本

あさ、眼をさますときの気持ちは・・・一級遮光の分厚いカーテンは、いまここが朝に似た夕方なのか、夕方に似た朝なのかを曖昧にする。家賃63000円、日当たり最悪のこの部屋は、梅雨になればまるで水の中を漂い続けるような息苦しさ。けたたましくなる電子のチョウチンアンコウだけが、朝だという、鬱陶しい。

Q本、部屋のカーテンを開け、

Q本

あさ、眼をさますときの気持ちは・・・せーの！

全員、パジャマから制服に着替えていく。

Q本

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

全員

まだだよ。

Q本

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

全員

まだだよ。

Q本

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

〔登場人物〕

嵯峨ふみか

Q本かよ

市岡一恵

加藤みき

小見波結希

藤野沙耶

牧野つくし

舞台上には制服姿の少女達が佇んでいる。

全員、パジャマを片付ける。

Q本

あさ、眼をさますときの気持ちは、面白い・・・けれど、それはそれは、しんどい。低体温、低血糖、低血圧、低気圧。睡眠を改善しなければさわやかな朝はやってこないというけれど、カーテンから透ける朝日は私を毎朝不機嫌にする。いつか自分の部屋のカーテンなんかを自由に選べる時が来たら、陽の光なんて少しも通さないようなのを選んで、朝から隠れて朝を迎えよう。朝が私に気づきさえしなければきっと、低体温、低血糖、低血圧、低気圧、全部私を通り抜けて、どこかへ行ってしまおうだろう。

Q本

先週お母さんに、コンタクトにしたいって言ったのだけれど、高校生になってから、と許してもらえなかった。理由を聞いても、

Q本、かけている眼鏡を外して置き、

Q本

あなたはまだいいでしょう、運動部でも無いのに。

嗟峨

その代わりに眼鏡を新しくしてもらったのだけど、眼鏡が変わったところで私が眼鏡面であることに変わりはない。そして、私の眼鏡が変わったことを、おそらく誰も、気づいていない。

全員、足元に落ちたパジャマを畳み、立ち上がるうとして「よいしょ」等の声を小さく漏らす。

嗟峨、置いてある眼鏡をかける。

そつと首をかしげ、

Q本、コンタクトをつける。

市岡

寝方が悪かったのか、腰が、痛い。

嗟峨

全員、顔を洗う。

全員、一斉に伸び。

市岡

背骨と背骨の間にこう、おばあさんが住んでいて、ん？でも、そうか、そのおばあさんが住んでいるそこは私の体だから、おばあさんは私で、で、よいしょって言ったのはおばあさんで、おばあさんは、私？ん？

顔を洗うといつも、眠気を無理やり洗い流すような、少しもつたない気持ちになる。結末を知らないあの夢やこの夢は、きつとどれも私の朝に恨みを持ちながら、尻切れトンボのその先を、ずっと夢見て待っているのだ。それを私は今日も洗って、またいつかと仕舞いこむ。

全員、鏡を見ながら、

全員 はあ……。

嵯峨 中学に入ってからすぐ、黒板の字がよく見えなくて、それで初めて眼鏡

をかけた。眼鏡を初めてかけた日のことは今でもよく覚えていて、私と、私の周りの全ての線がくっきりして、廊下の向こうで笑っている人の顔も、授業をする先生の目の下のクマも、友達のボロボロの鉛筆も、ノートのすみの悪口もみんな見えてしまつて、それで私はお昼に学校を早退した。家に帰つても何だか寂しくて、小学校の頃仲が良かった亮君に電話して遊ぼうつて言つただけど、亮君は塾があるから今度ね、つて。それっきり、亮君には連絡してない。その日の夢は確か、何度数えても誰も隠れてくれない、ずっと始まらないかくれんぼで、仕方なく私が隠れても、誰も見つけてくれないまま朝が来た。

小見波、元気に頬を叩き、

小見波 ぬるま湯で顔を洗つて、お母さんの化粧水とお母さんの乳液を顔に

つける。今日は、うわ、目の下のクマが酷い。こういう日は、クルクルクルつてマッサージをして血行をよくする。お母さんは「お肌の為には夜10時には寝なさい」つて言うんだけど、いや無理でしょ、宿題あるよつて、いつも思いながら寝るふりをする。お母さんはそれからいつもテレビを観てて、私はこっそり宿題をしている。はあ、朝の体操しなきゃ。

小見波、ストレッチをする。

他の人は朝食の準備を始める。

全員 いただきます。

嵯峨

お母さんは朝、寝ている。私が寝ている間に仕事から帰つてきて、私が学校に行っている間に仕事に行く。だから会うのはお休みの日だけ。でも、ご飯は三食作つてくれるし、洗濯や掃除だつていつもちゃんとあるからすごい。毎日私は不自由がない。お母さんは……どうなんだろう。

Q本、携帯電話で電話をかける。

Q本

あ、おはようございます。あの……すみませんちょっと調子が悪くて、あ、大丈夫です、なので、お昼まで、はい、お昼には行きません、すみません。はい、失礼します。

Q本、電話を切る。

藤野、時計を見て、

藤野

あ、やばつ。

全員

ごちそうさまでした。

Q本

せーの！

全員、急いで朝食を片付け、身支度を整える。

Q本 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？  
全員 行ってきます。

全員、家を出る。

藤野、駅までの道を走る。

[2]

藤野

毎日なんで、もっと余裕をもって家を出れないの、走って、走って、走って、あーどいて、毎日部活で走ってるのに、朝は何だか息が切れて、あー、信号……。さっき全力で抜かした人達がみんな追いついて、絶対笑われてる。直した寝癖ももうぐちゃぐちゃだし、はあ、帰りたい。信号変わって真っ先に走りだして、走って、走って、走って、なんとか駅……。やばっ、電車来るのちよっと早いんだけど、あー、それ乗りますー！

藤野、電車に駆け込む。

満員電車の中。

通路に立っている嵯峨の後ろに、牧野が座っている。  
その斜め前に加藤が立っている。

嵯峨

朝の電車は私達の憂鬱で走っているんじゃないかと思うほど、どの顔も虚ろ。仕事も学校も、嫌ならやめてしまえばいいって思うけれど、それができないのもまた知っている。うっかりすると、私も石像みたくなりそうだから、少しでも目を閉じる。

牧野、おもむろに化粧を始める。

加藤 皆さん、おはようございます。さあ、今日もやっつてまいりました、

グッドモーニングトレイン。司会はわたくし加藤がお送り致します。本日のターゲットは……なんと、同じクラスの牧野さんが、そちらでお化粧しております。どれどれ、ちよつと観察してみましよう。おお、なんと、電車の中でカミソリを取り出し鼻の下の髭を剃っています。揺れたら怪我をしかねません、ちよつと心配です。さあ、続きましては眉毛の剪定。ハサミを取り出しちよきちよきと、切った眉毛は今、何処いっどこ。

牧野 なんか、視線が、うるさい。

牧野、ファンデーションを取り出し、

加藤 続きましては、えー……何か、何かを顔に塗っています、何で

しょう？えー……何あれ。

牧野 なんか、視線が、うるさい。

加藤 牧野さんの寝起きでくすんだ肌が、何だか少し、明るくなったようです、へー……。

牧野、ビューラーを取り出し、

加藤 えー、続きましては、えー、何かこう、何だ？まつげをハサミ

みたいな、え、切るの？え？

牧野、ビューラーでまつげを上げる。

加藤 おおおお、え、あー、まつげ、ある……、そして、上に

上がっている、てこの原理だ！

牧野 なんか、視線が、うるさい。

加藤 えー、お化粧というのは、普段わたくし全くしないものでして、わたくしの母も同じくでして、何だかとても新鮮に、興味深く拝見している次第であります。

牧野、口紅を取り出し、

加藤 ああ、あれならわかる、口紅、私も七五三のときにつけたことある。

でもなんか気になっちゃって（唇を前に突き出して）口がうーっ  
て……

突然電車が大きく揺れ、牧野が塗っていた口紅がはみ出す。

車内の人々はぶつかった他の人に謝ったりしている。

加藤 あ、

牧野 やばい。

Q本 駅、駅、お降りの方は忘れ物にご注意ください。

牧野、一目散に車外へ駆け出していく。

加藤 あ、待って、あ、グッドモーニングトレイン、本日はこの辺で。

また明朝お会いしましょう。

加藤、後を追うようにして電車から降りていく。

小見波と牧野、クスクス笑う。

駅から学校までの道。

藤野

学生服姿の生徒たちが歩いている。

帰宅部は優雅でいい、髪も伸ばせるし、朝練も無いし、土日  
も休み。あー、ゆきちゃんの髪、サラッサラ……。

駅の改札では、小見波が牧野を待っている。

嗟峨、前の方を歩く市岡を見つけ、

牧野 おはよー。

小見波 遅いー。

嗟峨

かずちゃんおはよー。

牧野 ごめん、

市岡

……。

小見波 大丈夫ー？

嗟峨

かずちゃん、

牧野 (口の辺りを気にしながら) え、あ、何が？

市岡

あ、ああ、

小見波 え、遅かったから、

嗟峨

あ、ごめんね。

牧野 あ、駅でトイレ、入ってて。

市岡

あ、ううん、ごめん。

小見波 そっか。あ、昨日観た？

嗟峨

かずちゃんは同じ美術部。もう三年一緒だし、お昼ごはんとかも

牧野 観た観た。

藤野、またしても走っている。

食べたりにするけど、あんまりよく分からないし、よくぼーっとして  
いる。そういう時はお互い、静かにしている。朝もだいたい、応答  
が無い。テレビとかもあんまり見ないみたいだし、だから話題は特  
に、ない。

藤野 朝練さえなければ、っていうかもはや遅刻してるし、あー、もう

歩いちゃいたい、あ、おはよー！

藤野、加藤にぶつかり、

小・牧 おはよー。

小見波 がんばれー。

藤野

あ、ごめんなさい。

藤野 サンキュー！

小見波 (小声で) 今日もか。

加藤、驚いて何も言えない。

藤野はそのまま行ってしまう。

[3]

嗟峨

通学路は騒々しい。まだ学校に着く前なのに、同じ格好の人が道  
いっばいについて、毎日同じ道を通ればいいだけなのに、迷子になり  
そんな心細い気分だ。だから、何もしゃべらないのに、毎日わざ  
わざかずちゃんを探して、こうやってかずちゃんにしがみつこうよ  
うな気分で、学校までなんとか辿り着く。

嗟峨と市岡、学校に着く。

授業が始まる前の教室。

全員、各自の椅子に座ると、授業開始のチャイムが鳴る。

Q本

起立、気をつけ、礼。

全員

お願いします。

一限目、数学。

牧野

数学の授業、実は先々週ぐらいから全然ついていけない。xもy  
も、まず数学って言うてるのに数字じゃないし、これいつか、役に  
立つのかな……。正直、いい学校に行こうとか別に思ってたなくて、  
とりあえず、みんなが行くから私も高校は、行く。でも、その後の  
ことは……。っていうか、いまこのxもyもわからないのに、その後  
のことがわかるわけない。(嗟峨の方を見て)嗟峨さん、最近眼鏡を  
変えた。前はもつと、ガリ勉みたいな眼鏡だったけど、今度のはち  
よっとおしやれ。でも私は前のも、頭良さそうで良いなって思っ  
たし、今度のも良いと思う。前、嗟峨さんが体育で眼鏡を外して  
る時に、こっそりかけてみたことがあるんだけど、私には似合わなく  
て、やっぱり眼鏡はかける人を選ぶんだって思った。私は多分、選  
ばれていない。やっぱり、勉強が出来るような人とか、何か出来る  
ような人っていうのは、見た目から違う気がする。その人の周りだけ、  
空気が澄んでいるような、迷いがなくて自信があるように見える。  
本当はいつか、眼鏡が似合うようになって、xもyもわかりたいけ

ど、わからないことをわかるようになるやり方が、ずっと、わからない。

小見波 つくたん、ずっとそっぽ向いてる。

小見波、牧野をつつく。

牧野、小見波に気づき、

牧野 (小声で) どうしたの？

小見波、拗ねる。

Q本 起立、気をつけ、礼。

全員 お願いします。

二限目、理科。

藤野、居眠りを始める。

嵯峨 亮君と席が隣だった頃、私たちは理科の、特に虫とかが出てくる

ような勉強の時、先生にバレないようにして教科書を閉じていた。

私が虫嫌いなのを知って、隣の席だと見えちゃうからって、二人だけの内緒の約束。こっそりノートに絵を描いたりして、そう、亮君も絵がとっても上手かった。亮君は私が知らないロボットとか、

機械の絵を描いてて、私にはよくわからなかったけど、絵を描く亮君は楽しそうで、ずっとずっと、見ていたかった。でも、次の席替

えで離れ離れになっちゃって、隣の席の別の子と話す亮君を、何だか上手く見ていられなかった。いまは、細胞分裂のことをやっていて、なんか、ぶつぶつが、ああ気持ち悪い、体痒くなってきた……。

でも私の体もこんな細胞で出来ていて、細胞の絵を見て痒がっているのもまた私の細胞……うわ、気持ち悪。

Q本 起立、気をつけ、礼。

全員 お願いします。

三限目、音楽。

小見波 だた、モンペ。

小見波、牧野とクスクス笑う。

加藤

斎藤満代、32歳独身、東京都世田谷区在住。音大を卒業後、そのまま母校の音楽の教師に。毎日自作のズボン、通称「モンペ」を着用し、メロン柄やたこ焼き柄など、その柄は何故か食べ物に偏りながらも多岐にわたる。常日頃から張り付いたような笑顔を絶やさず、

中学生の我々相手にも、幼稚園児を扱うかのような丁寧さで接している……今まであんまり気にしてなかったけど、よく見るとモンペの顔、蛍光灯に照らされて、テカっている。(自分の鼻をこすり、

指を見て) はあ、良かった、セーフ。一方牧野さん、ああ、さらさらのスベスベ。牧野さんとモンペ、どうしてこんなにも違うんだろう。



お化粧？食生活？それとも、素材？

Q本 加藤さん、

加藤 あつ、

Q本 テスト、あなたの番ですよ。

加藤 あ、

加藤、教室の前に立ち、「野ばら」を歌い始める。

あまりにも歌が上手すぎる。

クラス中が加藤の歌を聞いて少しざわつきはじめる。

小見波、ずっとクスクス笑いが止まらない。

加藤、歌い終わると恥ずかしそうにしながらそそくさと席に戻る。

Q本 起立、気をつけ、礼。

全員 お願いします。

四限目、国語。

藤野 学校に来て、授業はどれも眠くて、寝てばかり。さっきまでx

って言ってたのに、今度は古典、ああもうこいつ何言ってるのか

わかんない……。周りを見るとみんな真面目そうで、あ、でも

市岡さん、絵描いてる……。

嵯峨 左利きの先生が黒板に字を書く度、薬指がキラキラ光る。ある時

小見波さん達が気づいて詰め寄ったら、保健室の先生と結婚すると

言っていた。結婚って、好きになって、一緒になって、子供を産ん

だりして、歳をとっていくわけだけど、普段私たちに勉強や道徳を

説いている人たちが、影ではそんなことをしているのかと思うと、

何だか少し気持ちが悪い。どうせ私たちに言うことなんて、どれも

建前ばかりな気がしてきて、結婚だなんて言われてから、どの先生

も信用ならない。とはいえ、私もそういう過程の結果で生まれて、

お母さんもお父さんも尊敬はしてるけど、今度は自分のことさえも、

少し嫌になってしまった。こんな気持ちを飛び越えるような恋や愛

はあるのだろうか。

Q本、携帯電話で電話をかける。

Q本

もしもし、あ、お疲れ様です。あの、すみません、朝に、昼には

行きますって連絡したんですけど、ちょっと調子が良くならなくて、

はい、申し訳ありません。あ、そうですね、私のデスクの左の

引き出しの赤いファイルです、はい、お願いします。明日はちゃん

と、行きます。はい、すみません、失礼します……。はあ。

Q本、電話を切る。

授業終了のチャイム。

Q本 起立、気をつけ、礼。

全員 ありがとうございます。

Q本 せーの！

全員、自分とお弁当を食べる相手を探す。

小見波は牧野を、藤野はQ本を、市岡は嵯峨をそれぞれ探し、加藤は人波の中で右往左往する。

Q本 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

全員 いただきます。

昼食。

各所でそれぞれがお弁当を開き、思い思いに食べている。

小見波と牧野、それぞれお弁当の蓋に手をかけ、

小見波 せーの、

小・牧 (お弁当の蓋を開きながら) どん。

小見波 だ、アンパンマンポテト。

牧野 いやこれ美味しいから。

小見波 いくつだよ。

牧野 いいじゃん別に。

小見波 いや、なんか、私が恥ずかしいからやめて欲しい、本当は。

つくたんのことは好きだし、お弁当だって一緒に食べるけど、あんまりダサイことされるとちよつと、無理。ていうかこの歳にもなってお弁当にアンパンマンポテト入れているのやばいって自覚ないのやばいし、美味しかったってそれはダメでしょ。私だって本当はもぎフルーツもぎもぎしたいし、ねるねるねるね練り練りしたいけど、全部小学校で卒業して、いまはちゃんと我慢してる。なのに何で、つくたんは平気でそういうことができちゃうんだ。

牧野 (アンパンマンポテトを食べて) 美味しい。

小見波 ていうかそう、朝やばくてさ、

牧野 あー、私もやばかった、

小見波 久々に見たのよ、電車で化粧。いややっぱあれ、マジで無いわ……。

牧野 あ、へえ……。

小見波 だってさ、まず起きろって話じゃん、電車の中で出来る化粧なんて30分早く起きれば済むのにさ、何であんな人がいっぱい乗ってる中でわざわざやるわけ、意味わかんなくない？

牧野 うん。

小見波 私はこんな揺れてる中でも化粧できますよーって見せびらかしてんの？あれ。

牧野 いや、流石にそれは……。

小見波 女としてあれは終わってるわ。どーせモテないんだよ、そういう奴は。

牧野 私は、私が思ったことを誰かに言うのがあんまり、好きじゃない。

嫌われたくないし、怖がられたりもしたくない。何がマルで、何が

バツか、私にはわからないから、全部サンカクで良い。でもゆきは、全部のことにマルやバツをちゃんとつけたがるから、すごい。

小見波 つくたんはそういうことしないから偉いよねー。

牧野 うん……。

小見波 あ、この前のあいどうだった？校門で出待ちしてた奴。

牧野 あー、何か、わかんない、連絡来るけど。

小見波 え、わかんないって何？

牧野 何か、遊びに行きましようって言われても、今度ー、みたいな。

小見波 ウケる。

牧野 だってどんな人か知らないし。

小見波 いや、あれはだいぶ良かったと思うよ。

牧野 何が？

小見波 え、顔。

牧野 顔……。

小見波 いいなあ、出待ち。

牧野 男の人とお付き合いするのも、それってマルをつけるってこと

だから、何かやだ。いつかその人にバツをつけられたり、私がその

人にバツをつけたりするのもやだ……はあ。

小見波 でも、つくたんに彼氏出来たら私と遊んでくれなくなっちゃうから

やだ。

牧野 えー、そんなことないよ。

小見波 ほんとに？

牧野 うん。

小見波 もー、私だけのアイドルつくたん。

牧野 えー、なにそれ。

二人、クスクスと笑っている。

チャイムが鳴る。

Q本 ご飯が喉を通らない。

全員 ごちそうさまでした。

掃除の時間。

各自教室を掃除する中、牧野と小見波が隅のほうでサボっている。

小見波 え、なんでまた教頭、後ろに立ってるの？

牧野 (ものまねをしながら) ゆきちちゃんつくしちゃん元気ー？

小・牧 いやああああああ！

牧野 ほんとにキモいあの教頭。

小見波 気配が無い！でも気がついてたら後ろにいる！

小・牧 いやああああああ！

牧野 あーもうほんとやだ。

小見波 女子校勤めるのとか、完全に趣味でしょ。

牧野 えー、怖い……

小・牧 やだやだやだやだ……

小見波 てか、何でうちらがあいつのウーパールーパーの世話しなきゃ

いけないの？おかしくない？

牧野 え、あれ教頭のなの？

小見波 そうだよ、あれあいつん家で飼ってたんだけど、新しくデンキ  
ナマズ飼うからって、職員玄関の水槽に勝手に放したんだよ。

牧野 デンキナマズ？

小見波 あーもうほんとにキモい、絶対あいつ、うちに世話させて  
喜んでんだよ。

小・牧 いやあああああああ！

嵯峨 あの、

小・牧 ……？

嵯峨 机、運んでくれませんか？

牧野 ああ、

小見波 え、別に人足りてるよね？

嵯峨 え？いや、

小見波 つくたん保健室いこー。

牧野 え、

小見波 ちよつとうちらお腹痛いんで。

牧野、嵯峨をじつと見ている。

牧野 あの……。

別に机、運んで良いと思うし、あの、どうしよう、待ってゆき、

あー、嵯峨さんごめんさい、でも嵯峨さんのこと嫌いなんじゃない  
くて、え、わかってくれるかな、どうしよう、

小見波 つくたん！

牧野 ……。

小見波 ちよつと、変なこと言っつてつくたん困らせるのやめてくれる？

嵯峨 いや、変なことって、

小見波 プス眼鏡。

牧野 え……。

嵯峨 ……。

小見波 やばい、つくたんお腹大丈夫？早く行こう！

牧野、小見波に渋々ついていく。

嵯峨 ああ、眼鏡は顔の一部です、なんて、どこそ誰かが言った言葉が、

痛い。

嵯峨、仕方なく机を運ぶ。

市岡

掃除をサボる、意味について、考える。ゴミは、私達が生活して  
いるから、生きているから、出る。動いたり食べたりで、私たちは  
ゴミを作っている。自分で作ったゴミは、やっぱり自分で片付け  
ないといけないと思うんだけど、あの人達はゴミ、作ってないって  
こと？いやでもさっきご飯食べてたし、そもそもトイレに行くのだ  
って、ゴミ、作ってるし。それこそ、伸びた爪を切るのだから、  
必要なことだけどゴミを作ってるわけで、え、っていうことは爪は  
ゴミ？そうなるときさっきまで爪は私の一部だったから、私は、ゴミ？  
ん？そもそも、切った私の爪は、いつから私じゃなくなるんだろう。

放課後。

部活動に勤しむ生徒、ダラダラと時間を潰す生徒、校舎のそこかしこに散らばっている。

美術室では、嵯峨と市岡がそれぞれ絵を描こうとしている。

嵯峨 先週描いた絵、先生が、

Q本 これは、審査であまり受けませんね。

というので、描き直し。先生は構図がどうの、配色がどうのというけれど、正直ピンと来ないというか、そもそも何故私はコンクールに向けて絵を描いているのか、描かなければならないのかがわからない。とはいえ、出すと言ったのもまた、私だ。やりたくもないことをどうしてやると言ったり、好きなものをどうして好きだと

言えなかったり、最近はどうしてか、気持ちに胸に沸き立っても、喉元あたりでそっと飲み込んでしまう。飲み込んだ気持ちは、だとするといずれ排泄されて、私から出て行ってしまおうのかもしれない。それって実は、結構寂しいことなんじゃないだろうか。だってやりたくないだの、好きだの嫌いだのと思えば思うだけ、私はそれを飲んで、出して、飲んで、出して、気がついた時には体の中はもう何も残って無いくらいの空っぽ。それで私の気持ちは、遠くの下水処理場でバクテリアに食べられて分解されてしまうかもしれない。と思うと、もう金輪際トイレになんて行きたくない。かずちゃん、窓開けていい？

市岡

うん。

嵯峨、窓を開ける。

嵯峨 結構暖かくなってきたねえ。

市岡 あー、うん。

・・・本当は、花粉症が、怖い。あれは、突然くる、らしい。いまふみちゃんが窓を開けたことによつて、ふみちゃんも私も、見えない花粉まみれで、あれもしかして、私が窓開けていいよつて言ったから、ふみちゃんが花粉症になるのをいま私、早めてる？もしふみちゃんが花粉症になつて、春、絵を描きたい時にくしゃみや鼻水で絵が描けないつてなつたとして、その責任は私に、ある？いやでも、春夏秋冬つねに世の中は動いていて、多分花粉症の人もその歯車だから、ふみちゃんも花粉症になつても大丈夫！ん？

嵯峨

かずちゃんは、いつもコンクールに絵を出さない。私には合わないつて言つて、最初は先生も困つていたけど、最近は何も言わなくなった。かずちゃんの絵は、何か、すごい。前の日までわけのわからない混沌とした何かを油絵で描いていたかと思えば、次の日には屋上からの景色を水彩で描いていたりもする。絵以外にも、とにかく毎日飽きずに何かを作っているけれど、何を考えて作っているのかはよく知らない。でも、かずちゃんの作品を見るのはとても楽しみ。

市岡

ふみちゃんが先週描いた絵、私は良かったと思つただけだな。やつぱりコンクールみたいなのは、よくわからない。私が一番いいと思つたならそれで良いつて思うんだけど、でもふみちゃんは他の人にも認めてもらおうつて、毎回ちゃんとコンクールに出すから、

すごいと思う。私、作り始めた時と作り終わった時で考えてることがいつもずれちゃって、この前なんて朝ごはんのお魚、食べられちゃって可哀想だなんて思ってたから、木彫の鯉が熊を食べてる絵が出来ちゃって、ふみちゃんは笑ってくれたけど、ほんとは、ちゃんとしたい。

市岡、粘土の塊を持ってきて、机に突然叩きつける。

嵯峨  
えっ、

市岡、粘土で木彫の鯉を作ろうとし始める。

その時、開けていた窓からバレー部のボールが飛んで来て、嵯峨の前のキャンバスを吹っ飛ばす。

藤野  
やばっ、すいませーん！

嵯峨、ボールを拾うが、外に投げ返そうとしない。

藤野  
ボール、投げてもらってもいいですかー？・・・は？

藤野、ボールを受け取るため美術室に駆け込んでくる。

藤野  
あの、ボール、返してもらえますか？

嵯峨  
あの、もう3回目ですよね。

藤野  
は？

嵯峨  
ボール、部屋まで飛ばして来たの、もう3回目ですよね。

藤野  
あ、はい。

嵯峨  
あ、はい、って、え、おかしくないですか？

藤野  
は？

嵯峨  
わざとですか？

藤野  
いや違いますけど、え、返してもらってもいいですか？

嵯峨  
・・・

藤野  
ていうか、何で窓開いてるんですか？

嵯峨  
は？

藤野  
まだ春なのに、こんなにいつも毎回窓開けてるほうがおかしくないですか？

嵯峨  
いや別に、窓の開け閉めなんてこっちの自由でしょう。

藤野  
それ言うなら、別にこの部屋に何度ボール飛ばしてもこっちの自由でしょう。

嵯峨  
いやいやいや、

藤野  
何度もボール飛んできたんなら、そっちが窓閉めればいいじゃないですか。何もしないってただの怠慢だと思っただけです。

嵯峨  
まず、もし窓閉めてたとして、今日みたいにこっちにボールが

飛んできてたら窓ガラス大変なことになってましたよね？っていう

かこんなところにボール飛ばすような人、野放しにしてるほうが

部の怠慢じゃないですか？

藤野  
は？

市岡  
待ってください、話せばちゃんと分かるはずですから。

藤野  
は？

市岡  
待ってください、話せばちゃんと分かるはずですから。

藤野 いえ結構です。

市岡 結構じゃないです、一旦落ち着いて、ふみちゃんも。もしボールを持つてたほうが落ち着くのであれば、代わりに同じくらい大きさのこの粘土を持つてるといいですよ。

嗟・藤 へ？

市岡、粘土の塊を藤野に差し出す。

藤野 いや、いいです。

市岡 いや、ひとまず持ちましょう、落ち着きますよ。

嗟 かずちゃん？

藤野 あの、馬鹿にしてるんですか？

市岡 してないですしてないです、まず話すために落ち着きましょうって  
いうことです、喧嘩してもどうしようもないですから、だから、  
はい。

市岡、再び藤野に粘土を差し出し、藤野は渋々それを受け取る。

藤野、粘土の匂いや絶妙な生温さに顔をしかめる。

市岡 あの、我々の言い分としては、窓の開け閉めなんて自由だ、って  
いうことなんですね。だって、暑いとか寒いとかっていうのももち  
ろんあるんですけど、こう、空気の換気とか、ちよっと風に当たり  
たいみたいなことって、普通にあるじゃないですか。だからといっ  
て、別に藤野さんにこの部屋にクーラーをつけろって言うてるん

じゃないですよ、だって、お金無いですよね？

藤野 あ、はい。

市岡 だから、お金の無い藤野さんが、我々に窓を開けさせないように  
するためには、今すぐバレー部をやめて、美術部に入って、で、我々  
を毎日団扇で扇ぐ必要があるんです。どうですか、美術部。

嗟・藤 は？

市岡 ん？

藤野 え、やっぱ馬鹿にしていますよね。

市岡 してないですしてないです。あ、じゃあ、発想を変えましょう。

ボールがこの部屋に飛んできたのは、ボールがバウンドして変な  
方向に飛んできちゃったからですよ。藤野さんは悪くない、  
ボールが跳ねるのがいけないんだとしたら、ボールと、この粘土を  
交換しましょう。

嗟・藤 は？

市岡 ん？

一同、しばし沈黙。

藤野 もうボールいいです。

嗟 へっ、

藤野、粘土を床に投げ捨て部屋を出て行く。

藤野 だから美術室に籠ってるような陰気な奴らは嫌い、何言ってるのか

全然意味分かんないし、粘土って、(手の匂いを嗅いで)う、うわっ、はー……。

藤野、水道で手を洗いながら、

藤野 確かに私は下手だけど、あんな言い方することない。毎日毎日練習して、練習して、練習してるのに、他の人がどんどんレギュラーになつて、私はずっと補欠で、向いてない、のかな……。そう思うと、美術部の人達は頭おかしいけど、補欠とかレギュラーとか、そういうのなのか、いいな……。いやでも私、絵描けないし、書道も茶道も料理もできない。ほんと、何にもできない。

先ほどの美術室。

市岡 ごめん、なんか……。

嵯峨 いや、ごめんね巻き込んで。

嵯峨、お腹を押さえてうずくまる。

市岡 ……ふみちゃん？

嵯峨 お腹、痛い。

市岡 え、大丈夫？

嵯峨 大丈夫……トイレ……！

嵯峨、美術室を出てトイレに駆け込む。

嵯峨

金輪際、トイレになんて行きたくなかったのに……。行かないで、どこにも行かないで、私から出て行かないで、私……。

Q本、ボールが当たって倒れたキャンバスを直す。  
そのまま、じっとキャンバスを見ている。

Q本

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

嵯峨

……。

Q本

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

嵯峨

……。

下校のチャイムが鳴る。

Q・嵯

はあ……。



下校時刻。

嗟峨はひとり、駅に向かっている。

嗟峨

かずちゃんに片付けを任せて、先に帰ることにした。お腹は

なんとか収まったけど、こういう時はしばらく体の中が気持ち悪い。  
すぐ電車に乗っても酔う気がするから、少し散歩していこう。冬が  
終わって随分日が伸びたけれども、この時間はやっぱり少し肌寒い。

加藤

はあ、ローマは一日にして成らず……。

公園。

遊んでいた小見波と牧野が帰っていく。

嗟峨、公園にやってくる。  
加藤を見つけ、

小見波

つくたん明日ねー。

嗟峨

あ、加藤さん？

牧野

またねー。

加藤

あ、ああ、

牧野、小見波の後ろ姿をどこかぼんやりと眺め、ため息をつき、

帰っていく。

加藤

え、

加藤、それを茂みの影からダンボールを被って観察している。

嗟峨

(加藤が持つリボンを見て) あ、それ？

加藤

ピンポンパンポン。本日は、公園にご来場頂き、誠に、ありがとうございます。

加藤

(頷く)

見波さま、落し物をお預かり致しております。至急加藤のところま

嗟峨

小見波さんの？

でお越しくださいます。今日一日、牧野さんを追っかけて、気が

加藤

拾ったの？

ついたら、牧野さんと小見波さんが公園で遊んでいるのを、

嗟峨

(頷き) あ、見えましたか？

加藤 いや何でもないです大丈夫です……。あの、これ明日、小見波

さんに返しておいてくれませんか？

嵯峨 いや、自分で拾ったんだから自分で返しなよ。

加藤 無理です。

嵯峨 は？

加藤 お願ひします。

嵯峨 え、

加藤、リボンを嵯峨に押し付け、走り去る。

嵯峨 ちよつと！……えーっ……。

Q本 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

嵯峨 (かくれんぼの声に重なるようにして)ちよつと大きいこの公園の、

茂みの向こうからは、こんな時間なのにかくれんぼで遊ぶ声がする。

鬼の子に内緒で、みんな帰っちゃったんだらうか。

Q本 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、もういいかい？

嵯峨 もういいよ。

Q本 ……？

嵯峨 もう帰りなよ。

Q本 ねえ、

帰ろう。

その時、市岡が公園を通りかかる。

市岡 あ、

嵯峨 あ、かずちゃん、

市岡 ……大丈夫？

嵯峨 あ、うん、ごめんね本当に、片付けまで任せて。

市岡 あ、それは全然いいんだけど。

嵯峨 ていうか、早く帰んなきゃなのに、ね、こんなところいて……。

市岡 あ、それも全然いいんだけど……大丈夫？

嵯峨 ……うん、大丈夫。

市岡 ふみちゃん、

嵯峨 ……？

市岡 一緒に帰ろう。

嵯峨 あ、うん。

嵯峨と市岡、公園をあとにする。

Q本、その後ろ姿を追いかける。

市岡 あ、今日のバレーボール、私もらつてもいい？

嵯峨 ああ、いいけど……返さなくて平気かな、個数とか、教えてそうだよね。

市岡 あ、そうなんだ……。

嵯峨 ……。

市岡 あ、じゃあ、私明日返してくる。

嵯峨 ええ、いいよ私が行くよ、

市岡 いやいや、私行く、

嵯峨 だって、ややこしくしたの私だし……。

市岡 いや私だよ、ややこしくしたの。

嵯峨 いや、かずちゃんは、うん……じゃあ二人で行こう。

市岡 ああ、そうだね。

嵯峨 ……。

市岡 ……。

嵯峨 ……。

市岡 まだ痛い？

嵯峨 ー、もうだいぶ良くなった。

市岡 そっか。

嵯峨 ……。

市岡 ……。

嵯峨 ……。

市岡、突然お腹に貼っていたカイロを剥がそうとして、

市岡 カイロ、あげようか？

嵯峨 あああ、え、いいよ、大丈夫。

市岡 そっか。

嵯峨 え、つていうかまだカイロしてるんだね。

市岡 え？

嵯峨 もう結構暖かくなってきたのに。

市岡 いいんだよ、お腹温めるの。健康だったら何でも出来るんだから。

嵯峨 あー、うん……。

Q本 これが、初めてかずちゃんに「一緒に帰ろう」って言われた日。

二人、駅に着く。

嵯峨 ありがとうね。

市岡 黄色い線の内側歩いてね。

嵯峨 あ、うん。

市岡 じゃあ、また明日ね。

嵯峨 うん、明日。

嵯峨、市岡と別れる。

ホームに満員電車がやってくる。

嵯峨、乗り込む。

牧野 なんか今日は、疲れた。

全員 はあ。

嵯峨 帰りの電車は、見渡すかぎりの疲れ顔。窓に映る私の顔もどんより

くすんでいて、いつからこんな顔、するようになったんだろう。

これから先も毎日毎日この電車に乗って、そのうちきつと私は、

大人の国に運ばれるんだ。シワが増えて、シミが増えて、白髪が

増えて、気がつけばもう今の私なんて見る影もなく、ただ、誰も

知らない女がひとり、窓に映る。私は一体、この先どこに行くんだ

ろう。でも私には今しか分からなくて、私がどこを通ったか知って

いるのは未来の私だけ。だからどうか、乗る電車を間違えないで

欲しい。そしてどうか、途中で降りないで欲しい。

Q本、嗟峨にそっと手を伸ばそうとするが、

嗟峨、お尻に違和感を感じる。痴漢である。

嗟峨 帰ろう。

後ろを確認するが、誰かは分からない。

Q本 待って、

嗟峨

なんか、どうしよう、触られてるんだけど、全然動けない。

嗟峨、家路を急ぐ。

降りたいけど、駅まではまだあるし、声も出ない。どうしてこんな  
搾りかすみたいな疲れ顔の私が、顔も見えない誰かのおもちやに  
ならなきゃいけないんだ。ああ、私もいつかこんな手を持つ人の  
ことを、好きになったりして、結婚したりして、そんなことがこの  
先あるなんて、信じられないけど、きっとある。この人とその人、  
一体何が違うんだろう、私はちゃんとその人を、この手と違って  
愛せるだろうか。

Q本

駅、駅、お降りの方は忘れ物にご注意ください。

嗟峨

さよなら。

電車が駅に着き、一気にホームへ人が流れ出す。

嗟峨、ホームでうずくまる。

全員、それをそっと見ている。

嗟峨

ああ……。

Q本

ねえ、

嗟峨

……。

全員、家に帰ってくる。

全員  
ただいま。

嵯峨  
お母さんは仕事に行った後だ。私が電気をつけなければ、この部屋は朝までずっと真つ暗。寝ている部屋をなんとか起こして、お母さんが作ってくれたご飯を食べる。

市岡  
ふみちゃん、ほんとにお腹、大丈夫かな……。悪いものを食べたのか、でもふみちゃんのお昼ご飯は今日も美味しそうだったし、お腹を冷やしたのか、でも今日は暖かかったし、トイレを我慢しすぎたのか……。もしトイレに行くのが恥ずかしいなら、明日から一時間に一回、トイレに行く約束にしよう。あ、もはや、トイレで部活やろう！ん？それにしても、お腹だけじゃない、なんか今日は、ふみちゃん辛そうで、明日になったらもう少し、元気になってるといいんだけど……。ふみちゃんいつも、大丈夫、大丈夫っていうけど、一体何が大丈夫なんだろう。

全員、夕食の準備をする。

全員  
いただきます。

藤野  
部活が終わると、お腹が空いて、つつい帰りに何か食べちゃおう。でも、家に帰るとご飯があって、また、食べちゃう。こんなんじゃない、ダメってわかっているのに、お腹はどんどん空いて、ああ、どうしてやめられないんだろう。ボール、当たり前だけど個数が合わなくて、

黙ってたら全員先生に怒られた。多分何人かは私がやったって絶対わかって、はあ、明日美術室に取りに行ったほうがいいかな……。いやでも、うーん……。行くか……。

嵯峨  
お母さんの味、というのは、みんなどこで覚えるんだろうか。

小さいころは一緒に台所に立ったりしたけど、最近はどうも、めっきり。どれも美味しいけれど、その美味しさが何で出来ているのか、食べても食べても分からない。本当はお母さんに教えて欲しいんだけど、お母さんは、忙しい……。もし好きな人が出来たとして、いつか一緒になるとして、料理とか洗濯とか、みんなちゃんとしてあげたいけど、それはどこでいつ、覚えればいいんだろう。ああ、今日は、どれもこれもがもやもやする。お母さんのご飯くらいは、美味しく食べていたいのに、なんだかどれもが、邪魔をしている。ごちそうさまでした。

全員

全員、夕食を片付け、風呂に入り、パジャマに着替える。  
Q 本だけは着替えずにそのままの格好でいる。

小見波  
ねえおかあさん、私のリボン見なかったー？……。はあ、無い。絶対にあつたのに、リボン。家に帰ってきて、気がついたら無かった。

ええ、どこいったんだろう、もしかして、誰かに盗まれた？いやでも、絶対あつたし。もし落としてたとしても、誰かに持って行かれちゃってたら、どうしよう。

加藤

きつと、お化粧だけじゃない、食べてるものも着てるものも、私とは違う気がする。もう、全部全部知りたい、私がどうしたら綺麗に

なれるかを。ああ、リボン、やっぱ私が返せばよかった。そうしたら弟子入り、出来たかもしれないのに。

嗟峨

どうしてさっきの人は、私の体を触ったんだろう。こんな、美しくもない体なのに、可愛くもない顔なのに。制服を着ている時はみんな等しく中学生で、その殻に守られて何とか生きていたけれど、こうしてみると、私の体は頼りなくて心細い。いつかは私も美しくなるだろうか、とはいえ、ある時突然足が伸びると思えないし、朝目が覚めたら鼻が高くなっているわけもない。このままこの体と生きていくなら、何とか愛して寄り添い生きる、もうそれしか道はない。でも、それさえ信じられないくらい、この体は、心細い。

Q本、じつと携帯電話を見つめている。

Q本

今も十分、心細いよ。

各自、思い思いに寝る前の準備。

牧野

xもyも、家に帰ってきたらますます分からない。教科書を開いても、眠くなる呪文ばかり。嗟峨さん、私のこと嫌いになっちゃったかな……。はあ、全部の答えが書いてある本、どこに行けば買えるんだろう。

嗟峨、手紙を書き始める。

Q本

お母さんへ。いつも全然話せないから、今日は手紙を書くことにしました。今日の晩ごはん、煮物もだし巻き卵もとっても美味しかったです。もちろん朝ごはんも、お昼のお弁当も、どれもみんな美味しくて、私は毎日幸せです。学校はとても順調で、勉強は難しいけれど何とかやっています。クラスの子とも仲良しで、前に話したかずちゃん、覚えてますか？あの子とはいまま毎日一緒に学校に行って、一緒にご飯を食べています。先週、進路希望表に、美術が勉強できる高校を書きました。そこに受かるために、部活ではコンクールに出す絵を描いています。少しでも受験の役に立つならいな、と思って、いま頑張っています。お母さんは、私が将来絵を描きたいと言ったら、どう思いますか？

嗟峨

この先が、どうしても、書けない。

Q本

スラスラ書ける人だったら、もしくはこれすら書こうと思わないような人だったら、私は今も、描いているかもしれない。

嗟峨

どうしよう……。

Q本

この手紙は結局、お母さんに渡せないまま、今も捨てずに持っている。

嗟峨

お母さん、とても頑張っていて、だからお礼は言いたいのだけれど、私は毎日甘えてばかりで、自分の夢なんて考えていて、何だか少し恥ずかしくなってきた。大人は、夢を持って言うのに、生活の安定だの、結婚だの、教えてくれるものはどれも夢とは食べ合わせが悪い。和洋折衷全部を並べて、どれも残さず食べるなんて、どうせあなただって出来ないんでしょう？そうしてお腹が満たされたって、本当の幸せじゃないんでしょう？

Q本 もういいよ。

嵯峨 じゃあ、本当の幸せって、一体何なんですか。

Q本 もうやめようよ。

嵯峨 はあ……。

Q本 ……やめよう。

Q本、携帯電話を取り出し、電話をかける。

Q本 もしもし、あの……かずちゃん？ うん。ああ、あ、ごめんね急に

夜中に。寝てた？ ああ、いま平気？ あー、久しぶり。元気？ あ、

元気……じゃない、かも……？ ごめんなんか、うん。あ、

大丈夫大丈夫、あ、うん、大丈夫……じゃない、かも……。

ごめんなんか。ああ、最近はどう、仕事。何か、見たよネットで、個

展やつてるんでしょ？ へえ……っっていうか、ごめんねそんな

忙しいときに。え、観に行こう、かな……。あ、本当に？ 明日

とか、いる？ じゃあ、明日行く。ああ、仕事は……。会った時

話すよ。うん。何か、ありがとう。いや、うん、とりあえず明日。じ

ゃあ、またね。

気が付くと舞台上では、皆がうつらうつらとしている。

嵯峨

あさ、眼をさますときの気持ちは、面白い。でもときに、私を酷く傷つける。昨日と地続きの体を見て、昨日と何も変わらない世界を見て、どうしてあさは無遠慮に、ただ美しく輝くの。それから、も

う出会えない昨日の体が途端に愛おしく思えて、過ぎ去ることもまた無遠慮に、ただ美しく輝くの。

嵯峨、かけていた眼鏡を外し、そっと置く。

Q本 明日こそ、明日こそはと眼を閉じる。それでも夜はただ無力で、

起きた私は私のまま。守ってやれなかった私を、でも守ってはく

る私を、もう触れられない私を、でもそばにいる私を、私はどれだ

け飲み込んで、ちゃんと一人になれるだろうか。ああ、君よ、いや

私よ、どうかそのまま大人にならないで。美しさも惨めさも、私だ

けが知ってあげる。その後は、昨日の私が今日の私を、毎日毎日

描いていこう。

Q本、置いてある眼鏡をかける。

嵯峨 それでも私、起きるから、また明日。でも今日の私はもうこれまで。

Q・嵯峨 もう、ふたたびお目にかかりません。

無断複製・転写を禁じます。

作品に関するお問い合わせ、上演許可等につきましては、カミグセ (info@kamiguse.com)までお問い合わせください。